イスラエル雑感

吉見崇一

アテネでは、塔乗の際、ボディチェックを受けロッド空港到着後も機内で官憲がなにやら不審の物品を検査していたが、入国は思ったより簡単であった。だれの荷物も開かれなかった。一年前の五月末の流血事件を思い出して、改めてあたりを眺めると、やはり警戒はきびしい。私服の警備員が、それとわかる目つきで我々の間を泳いでいた。

私にとっては丁度一年振りのイスラエルであったが、特に大きな変化があったとは思わないが、ラジオのニュースは毎日のように、ゲリラがどうした、どこの国がアラブに武器を売った。新しい移民が着いた、国連安保理がどうした、ストライキがどうのと繰返している。

八年間大統領の任にあったザルマン・シャザール氏が、若いエフライム・カツィール氏にバトンを渡したが、この国の大統領は名誉職だから、政治的な意味は薄い。カツィール氏は科学者である。

大統領の更迭よりも大変なのは次期首相らしい。七〇才を越えた女性首相のあとを継ぐものは誰か、モシェ・ダヤンの名声は抜群だが、彼の論理は力、蔵相ピンハス・サピールには思慮がある。副首相イガール・アロンは椅子のすわりかたを知らない。こんな風評も、キブツニックから耳に入ります。

我々のイスラエル到着一ヶ月前には、イスラエル軍がレバノンの奥深く侵入し、首都ベイルートでアラブゲリラをたたいた。先日国境のキブツを尋ねたところ、頻りにゲリラ出没の話をきかされた。夕刻になると甲装車が警戒に当っていると言っていた。

フランスがリビアに売った戦闘機ミラージュが、エジプトに運ばれたといって問題になったのもつい先ごろですが、それがうやむやになったころ、今度は、アメリカがサウジ・アラビアとクエートにファントムを売るという話、何が何だか予想もつかない。

アメリカは、石油の利権に大いに興味があるので、イスラエルにとっては頭の痛い話である。結局、国際政治は各国とも利害関係で動くのだとキブツニックが言う。

五月七日、二十五回目の独立記念日、エルサレムは五年振りの軍のパレードで賑わった。何でも国連の中止勧告を無視して断行した由。この国にしてみれば、ようやく四半世紀を経て、大いに誇示して喜びたいのも当然であろう。

この新興イスラエルの知られざる反面に、最近、キブツのウルパンには、ソ連から来た青年男女が多数ヘブル語を学んでいるが、彼等は労働をいとい、評判が悪い。労働者の国ソ連から来て、怠者が多いのも皮肉である。

ソ連はアラブ諸国の思いをよそに、国内のユダヤ人のイスラエル移民を条件制限しながらも認めているが、イスラエルでは、その制限を非難している。

独立以来、初めて西独首相がイスラエルを訪問した。先年、ウイリー・ブラント氏がノーベル平和賞を受けたとき、複雑な反応を示すイスラエル人を見た。ともあれこの訪問は歴史的なことである。

アメリカの若者たち

阿木幸男

東京でも暑い日が続いていることと思います。送っていただいた月刊キブツを、じっくり読ませていただいています。言葉のはしばしに、日本の地下水の音が聞こえてきます。僕は、ますますアメリカと日本で同種の動きが同時的に進んでいることを感じます。単に共同体の動きが活発になっているということでなく、同世代の若者の『感性』が、とても似かよっていて、英語と日本語の違いを除けば同じ世界に生きているという確信を強めている今日この頃です。

一言、二言、話すだけでピィーンと通じあってしまう、そんな感じがあります。僕が付きあい、知りあってきたアメリカの若者の多くはそんな感じです。『社会』に対する考え方に共通するものが多いようです。『失望』『フラストレーション』『・・・それでも自分たちでどうにかしなければという思い』、『政治』や『個人と個人』のレベルから『社会』を『政治』を考えてみようという発想、「抽象的概念で頭デッカチになるより『生活』『自然』『健康』……に関する実際的で具体的な知識を身につけよう」。「こたごた、言うよりもまずやってみよう！ Do it yourself ！」「生態学を学ぼう！食物の屑は土に帰して肥料にしよう！『パン』『ヨーグルト』『ビール』『ワイン』『つけもの』『とうふ』（若者の間で人気あり）その他日常食品を自分で作ってみよう」。「健康のために YOGA や TAI CHI をやろう。マッサージを覚えよう。玄米を主食にして、質素な生活をしよう！」「ものを捨てる前に修理して長もちさせよう。手づくりの楽しさを味わおう」……。

僕がアメリカの各地で会って来た若者たちはそんな感じで生きています。なにか『生活』の原点にもどろうという発想があるようです。ある人は『宗教的』になっているのだと言いますが、ある『澄明なもの』を求めて、日々の生活の中で自分自身を研鑽している。社会のある流れが、ますますドロドロに濁り、『人』を『自然』を犯しつづける時に、若者たちのみずみずしい感性は必死にもがきながら、ある『澄明なる原点』を対極に持とうとする方向にかりたてているのかも知れない。そうせざるを得ないところに来ているのかも知れない。確かに、かなり多くの若者たちが「ハリ・クリシュナ」・「ジーザス・ムーブメント」「グル・マハラジ」などに傾倒しつつあります。かつて『破滅の前夜（EVE OF DESTRUCTION）』を唄って、若者のアイドルになったゲーリー・マクガイヤーは、いま、ジーザス・ムーブメントに加わり、全米各地の教会、学校、をギターを片手にまわって『愛』『ジーザス・キリスト』に関する歌を唄っています。偶然に、旅先のニュー・メキシコのロス・アラモスで彼のコンサートがあり、出かけました。

ハデな舞台衣しょうは投げ捨て、ジーパン

にTシャツのゲリー・マクガイヤーは、長い髪をゴム輪でまき、そしてサンダル。かつての一世を風びしたスターの面影は感じられず、サンフラン・シスコあたりの通りを歩いています。中年ヒッピーの気のいいおじさんというかんじ。静かに、うつむきかげんにマイクに近づき、内気な少年のごとくソフトな声で自己紹介をし、唄い出しました。唄い出すと別人のように、ボリュームのあるみごとな声で「一人の男が数々のおろかなことをして、迷いに迷って、ある日、キリストを信じるようになった。」といった内容の歌をひろうしてくれました。言葉の一つ一つのトーンが、どんどん僕の心の中に入って来て、こだまし、ブルブルと数回身体がふるえるのを覚えました。長い物語の歌を唄い終えると、彼がキリストを信じるようになったいきさつ、さまざまな苦々しい思い出などを、かつての迷いの道を告白するように話し、再び自作の歌を続けました。会場のかなりの人は泣いていました。僕も思わずポロリと行きそうになり、ハッとしました。その『ハッと』が何であったのか、なぜスンナリ、ポロリと行かなかったのか？　それが僕の正直な反応だったのでしょう。

最後に、彼が聴衆の我々に呼びかけて、唄い出した〝HAPPY DAY〟は、ハッピーという言葉が、くり返し、くり返し、何度も、何度も出て来て、まるでその歌には〝HAPPY〟という言葉しかないかのようでした。僕は、彼と人々と唄い出したものの、何かヒッカカリがあって、それは、もう、心の中でどうしようもなく大きくなってしまって、途中で唄うのを止めてしまいました。それを「ジーザス・ムーブメント」や、ゲーリー・マクガイヤーへの批判に結びつけるつもりはありません。僕の周辺で、とりわけ、何らかの社会変革活動か、平和活動をしている人たちの間に、彼らへのかなり強い批判があることは確かです。そうした批判を要約すると〈心の平和を唱えるだけでは社会は変らない。社会機構に挑戦して、具体的に変革しなければダメだ〉〈歌を唄って何ができる。それは単なる自己満足だ〉〈ああした運動がマイノリティ・ピープル（黒人・プエルトリコ人、インデアン）の社会的地位を変革するのに役立つとは思えないね〉〈アメリカ社会の政治的状況分析を彼らはしていない。まあ、一時のブームだね〉

そうした声を各地で聞きました。そうした批判に一理あるとして、そうした批判をする人たちが、僕自身も、どれだけ『ジーザス・ムーブメント』を知り、理解しているか？とても疑問です。『うわべだけしか知らない』というのが僕の正直な答えです。時として、『偏見』は理解することを閉ざしてしまう。『偏見』は、その短所、弱点にその人の眼を集中させてしまう。自分自身をかえりみて、反省しなければと思っているのです。単なる悪口とか、見えない批判は、批判にもならない。批判は他者に対するだけでなく『己れ』にも向けられなければならないと思う。

もっとも困った存在は、あらゆる『運動』と名のつくものを、ご自満の論理でコテンパンに批判して投げている『評論家諸氏』で、本人は何もしない。もっとも救いようのない人のように思われる。僕自身の考えでは『運動』にはそれぞれ、『ふり幅』があって、長所もあれば弱点もある。ある人たちには弱点しか見えないから、批判が始まる。その批判も建設的で、その人自身が試み、実践していることなら耳を傾ける価値はあるのだが。そうしたことは、実際、少ないのである。残念なことだ！

唄うのを止めて、じっーと、人々の歌に耳を傾けた時、僕には数日前に耳にしたニュース、キャリフォルニアでひどい待遇で働かされて来たメキシコ系農場労働者のストライキが、暴力団によってつぶされそうになっている。暴力で労働者が傷つけられている——を思い出し、心配していました。この二ヶ月ほど、農場労働者を支援するキャンペーンに参加して、彼らの運動の苦しさを知りました。それだけに、その『ハッピーな歌』は僕には、いや、その農場労働者には遠く思われたのです。言いようのない気持になり、〈しらじらしさ〉を感じるほどだった。いつしか、その長い「HAPPY」な歌は終り、ゲーリー・マクガイヤーは舞台のスミにさがり、腰をおろした。人々は立ちあがり、割れんばかりの拍手をし、彼は彼で、はにかむようにして、それを受けていました。その彼のハジライぶりが眼に焼きつき、一言、語りかけたい衝動に僕はかりたてられました。僕は思い切って舞台のスミによじのぼり、彼に話しかけました。「……すばらしい歌、ありがとう。僕はあなたの〝破滅の前夜〟を日本で何年か前に聞き、強烈な印象を覚えた。そして、今日、ここに来てあなたの心の歌を聞いて感動した。

——正直に言って、いくつかの歌にはとまどいを覚えたり、『距離』を感じたり、今の僕にはどうしても唄えないものもあったが、それでも、あなたから何かを感じた……。」うなづくように聞いていた彼は、ガラッパチ口調で語り出した。「……実は、オレも唄っていて、ふるえたり、とまどいを覚えたり、涙が出て来たり、さまざまな感情が出て来るのだよ。オレもまだ迷っている。でも『キリスト』を『本当の精神的なもの』を信じたいし、信じられると思うんだ。オレは宣教師じゃないから、えらそうなことも言えないし、バイブルのどこかの章をひっぱり出して、質問されても答えられない。でも、いま『キリスト』を信じているんだ。オレたちを救ってくれる『キリスト』を！　このうす汚れた病気の社会を救う『キリスト』を！　もう、この社会はどうしようもないところに来ているのではないか。オレたちは、お互いを信じ、愛し合わなければならない。『キリスト』はダメになりかけていたオレを救ってくれた。むずかしいことは言わなくていい。信じるんだ。オレ自信の体験から、信じられるんだ。『人』を信じるんだ。信じたい。もっと信じたい。……今日はわざわざコンサートに来てくれて、ありがとう。うれしいよ。とてもうれしいよ。みんな美しい人たちだ！アンタは日本から来た。オレの歌を聞いて何かを感じ、話しかけてくれた。それだけでうれしいよ。それはすばらしいことだよ。オレはうれしい。アーメン」。ゲーリーの口調は『オレ』『アンタ』といったガラッパチだが、とてもやさしいひびきをもっていた。

ポロリと涙が落ちるのをこらえながら、彼と握手した。いつしか、周りには数人の若者がとりまいていた。彼のひとみは澄んでいて、うつむきかげんだった。僕は、ただただ彼の『何か』にうたれていた。

僕はいま、ロス・アラモスの荒けずりの自然の中にいる。空気はかわき、のどはからからである。今度の旅で心の中がさまざまにゆれ動いてきたし、ゆれ動きつづけることだろう。ゆれ動かされながら、みずみずしい係わりをつくって行きたいと願っている。

——真赤な、大きな、大きな夕日が、沈んでいく。僕は動かない。動けない——

イスラエルのキブツと日本の協同体・その違い・（四）

——連載——

アブラハム・ベンヨセフ
訳　山崎雅代

物質的な違い

前回は、イスラエルと日本の協同体の精神面の違いについて述べたので、今回は特にそれとは対照的な物質的な違いに目を向けてみよう。当然、この問題は把握するのが非常に容易であり、その違いが今まで述べてきたものよりも、はるかに明確に浮び上がってくる。

イスラエルのキブツは、本来は一つの庭園村である。どこの食堂にも、外側には広い芝生があり、各メンバーの家々の周辺やその前には、必らず花壇がある。メンバーが憩う娯楽室や学校や子供の家の周囲にも、それぞれの庭園や芝生があり、いたる所に木が植えられ、イスラエルの強烈な太陽の下に日陰をつくる。イスラエルで最も暑い地域では、美しいなつめやしの木がキブツ内に植えられているのが普通で、また、それは実を穫る目的で栽培されている。

家々の間や、時には日本庭園の形式に似た石造りの庭園とか池があり、その間を石やコンクリートで舗装された小道や砂利道が続いている。その風景は、どこへ行ってもまったく美しいもので、それは明らかに西洋的な美しさであって、東洋的な自然の中に織り合わされたものでなく、自然の上に加えられた人工的な美である。

キブツでは、すべてのメンバーが夫々の家の周りの庭園や芝生の世話をしているが、なおその上に、たえず草花のめんどうを見る専門の庭師を置いて花壇に気を配っているキブツもある。また、あるキブツでは、それ程多くの花はなく、雑木や灌木のおい茂る公園のような感じである。

日本には、少数の例外はあっても、このようなキブツまたは協同体は殆んどない。それらは、大底、非常に簡素で質素な村であるが、実際、村と呼ぶには、殆んどの場合、あまりにも小さすぎるようである。

乾燥しきったイスラエルの夏よりも、日本は雨の多い国で草の成育には適しているにもかかわらず、心境と新しき村以外では芝生は見られない。あちらこちらに小さな花壇があるにはあるが、それは人目にふれるようなものではなく、しばしば日本では起り得ることだが、花壇が野菜畑といっしょになっていたり、誰のものとも知れず、どんな花かもわからないで、小さな片すみにあったりする。

キブツ、ベイト・アルファの文化センター

協同体（モシャブ・シトフィー）のメンバーは、自分の家の庭をよく手入れし、非常に美しく整えているのに、村全体の庭の構成に関しては、概してそんなに計画的ではない。しかしながら、一燈園キブツは例外で、そこでは過去半世紀余りの間に、美しい公園のような山腹に立派な建物が、メンバーの献身的な努力によって造られた、清流と岩とすばらしい木々のある庭園の中に配置されている。

青森の近くにある古い宗教キブツの一つである大和山では、優雅ですばらしい木造りをうまくいかした木造家屋の美しさには目をみはるものがある。

美しい庭をもつ二、三の協同体があるが、殆んどの協同体では、協同でこの問題について注意を払ってきたとは思えない。日本人が花を愛するという事情を考えてみると、驚かずにはいられない。

家の問題に関して言えば、日本の協同体では、ふつうは標準型の小さな農家であり、その地方の協同体以外の個人農家と変りはない。しかしながら、イスラエルのキブツの家は、独特な長屋になっていて、標準型のその建物の中は、一家族につき二部屋で四家族のアパートになっている。新しい家が建てられる毎

に、ますます近代的な様式になり、快適なものに発展していく。それらは、ある時には二階建であったり、時には三階建のものもある。

日本の家は二階建が多く、もちろんコンクリート造りではなく、木造である。日本のキブツの食堂の中には、しばしば非常に気持のいい、相当大きな建物もあるが、イスラエル中の建物の中でも、最も立派な堂々とした超近代化されたコンクリート造りで、日本のものとは、比べものにならない。キブツの娯楽室もまた、そのデザインにおいても設備においても、立派である。幾つかの日本の共同体は、立派な建物をつくるという問題に関しては、あまり気を使っていないようだが、偶然にも共産主義との結びつきを持っている二つの協同体（モシャブシトフィー）、である前森山と北斗は、メンバーのために本当に立派でモダンな建物を造り、また、それを誇っている。

イスラエルのキブツは、常に、農場や工場と住宅及び共同施設の区分を徹底して分けることに、非常な神経を使っている。日本の共同体の場合も、一般的には、同じであるが、ある場合には、必ずしも、その区分が明確でなく、彼らの飼っている動物達と、ほとんど

環境保全の行き届いている—燈園内

背中合せで、住んでいるというケースもある。これは、イスラエル人の見解からすれば、非常に奇妙なものである。工場ばかりでなく、動物達の建物も、常にそうとは言えないが、大体において、イスラエルの方が立派である。北斗と前森山の牛たちは、人間同様幸運であるが、一般的に言えば、日本の共同体では、動物たちも、立派な設備を甘受しているというわけではない。とは言うものの、東山産業の壮大かつ壮麗に機械化されている鶏舎は、注目すべきものである。

その他の生活上の物質的な面、たとえば、食物、衣類などに関する違いは、いずれにしろ、東洋と西洋のもつ違いが基本となる。そして、当然それぞれの国の中でも場所が違うと違いが生じるように、共同体に於ても、違いがあるので、ここで詳細に立ち入るのは、無益である。しかし、文化といわれるもの、例えば、研究、読書、音楽などに関しては、格段の差があり、イスラエルのキブツでは、高いレベルに達しているにもかかわらず、日本の共同体では、ほとんど皆無と言ってよい程だ。

もし、日本の共同体運動が、現在、途方もなく、急速に増加しつつある社会問題に直面している日本で、将来重要な役割を持ち、社会的意味を持とうというなら、こうした文化活動の乏しさに多くの注意を払う必要がある。現実に新しき村の様な例外も含めて、標準型の共同体が、急速に増えつつある。それは、あたかも心境の注目すべき例のように、巨大なレクリエーション室や、様々のホールを併設したメンバーのための最高で新しい設備のある共同体も見られるが、実際には、日本の協同体は、次の様にならなければならない。つまり、いつまでも限られた生活水準を保持するにすぎない農業に依存することなく、工業を導入することによって、立派な建物や共同設備を造るに足る経済を確立することである。不幸にも、現段階では、そうした経済性の容易に高めることができるはずの共同体の生活の方が、周囲の農民達よりも、概して生活水準が低いのである。

—つづく—

「月刊キブツ」バックナンバー

あなたのお役にたてて下さい！
最近の「月刊キブツ」の特集です。未だ在庫がありますので、お申しで下さい。（定価一五〇円　送料一六円）

■一九七三年　五月号
「イスラエルのキブツと日本の共同体」
その違いは何か——北試・ベンヨセフ

■三・四月号
キブツとは——「キブツの内容解明」
「聖書の国イスラエル」

■一月号
「イスラエル社会主義ノート」
「生命の対話を求めて」——野本三吉

■一九七二年　十一・十二月号
「世界一の精薄者養護施設心境荘苑」
「ライフセンター共同体と非暴力訓練」

■八月号
特集「近代文明からの解放」
（ガンジーの思想を中心にして）
SCI運動とサルボダヤ